

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：35404

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02398

研究課題名(和文)現代ドイツ映画を巡る「難民としてのドイツ人」：政治メディア論的研究

研究課題名(英文)Germans as Refugees on Contemporary German Film: Political Media Studies

研究代表者

古川 裕朗 (Furukawa, Hiroaki)

広島修道大学・商学部・教授

研究者番号：20389050

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：2000年代と2010年代にドイツ映画賞作品賞を受賞した作品に関してメディア論的な分析考察を行った。主に「移民の背景を持つ者」「ナチ・ドイツ」「東西ドイツ」を題材とした諸作品に焦点を当て、主題展開を把握しながらメディア論的な意義を探った。特に「ドイツ人のディアスポラ」の視点から考察分析を行った。その結果、2000年代の諸作品は概して「ホーム」に帰る物語や「ホーム」に気づく物語を描き出していることが確認できた。また2010年代の諸作品は概して「ホーム」を失う物語や「ホーム」を新たに築く物語を描き出していることが確認できた。これらの研究成果は『ドイツ映画史の基礎概念』という著書の形で公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の主要な学術的意義は、ドイツ映画史研究に関して、ドイツ映画賞受賞作に焦点を当てメディア論的な視点から分析考察を行い、映画作品を通じた21世紀ドイツの世論傾向をいち早く明らかにし、それを一種の精神史として記述した点にある。研究成果の主要部分は著書『ドイツ映画史の基礎概念』として公表されたが、この書物は専門性を備えた学術書であると同時にドイツ映画史理解への手引書という側面を持つ。ドイツ映画に対して、「同文化理解」ではなく「異文化理解」の視点から分析考察を行い、特にユダヤ・キリスト教的な背景を重視しており、よって異国の映画作品が有する特異性を日本社会に紹介したという点でその社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：I analyzed and considered the films that won the German Film Award for Best Fiction Film in the 2000s and 2010s from the perspective of media theory. Focusing mainly on various works on the subject of "people with a migration background," "Nazi Germany," and "East and West Germany," I explored the meaning of media theory while grasping the theme development. In particular, I conducted a study and analysis from the perspective of the "German Diaspora". As a result, we were able to confirm that the works of the 2000s generally depict stories of returning to 'home' and stories of noticing 'home'. In addition, it was confirmed that the works of the 2010s generally depict stories of losing 'home' and stories of building a new 'home'. The results of these studies were published in the form of a book titled "Basic Concepts of the History of German Film".

研究分野：美学・芸術文化学

キーワード：ドイツ映画 移民の背景を持つ者 ナチ・ドイツ 東西ドイツ ドイツ人のディアスポラ

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は科研費の前研究課題「ナチ映画を巡る現代ドイツ・ナショナリズムのメディア論的研究：2010年代の新展開」(26370192)を引き継ぎ、それを発展させたものである。

- 1) 21世紀のドイツ映画賞作品賞の受賞作に関し、2000年代から2010年代にかけての変容については一見ナショナリズム対グローバリズムの対立軸で読み解けるかのように思えるが、次のような複雑さを孕んでいる。
- 2) 2000年代のドイツ映画賞受賞作は、他民族と協力してナチと対決する「良きドイツ国民」を積極的に描き出した。これは表立っての主張が躊躇されるドイツ・ナショナリズムが、グローバルな物語設定を弁明的に有効利用した結果だと考えられる。しかし、ドイツ・アイデンティティの探求という高揚感を利用してグローバルな価値を推進しようとする裏返しの視点も見える。
- 3) 一転して2010年代のドイツ映画賞受賞作は、ナチに通ずる「凡俗なドイツ国民」を描き始めた。当初この傾向は、2000年代に高揚したドイツ・ナショナリズムが後退した証左であると推測された。しかし、未だ満たされざるドイツ・アイデンティティへの渴望感を有効利用してグローバルな価値を推進しようとする裏返しの視点も見える。
- 4) したがって、2000年代から2010年代にかけての作品傾向の変容は、ナショナル・グローバルの対立軸では解き明かし難いことが予想された。それゆえ、本研究ではこのドイツ映画史上の変容を戦後ドイツの政治的セルフ・イメージである「難民」の表象を軸に据えて、考察分析を行うことにした。

### 2. 研究の目的

本研究は、21世紀のドイツ映画賞(作品賞)受賞作に関し、戦後ドイツの政治的アイデンティティである「難民としてのドイツ人」という視点から、現代ドイツ映画史を作成する。特に、映画が政治メディアとして他の政治言説との反発・同調を通じて雰囲気的に醸成する世論空間を観察し、ドイツ・アイデンティティの変容と複雑性をグローバルな価値観との連関で捉える。具体的には、「難民」というセルフ・イメージの来歴を整理し、作品をドイツ要人の「公式演説」と比較照合して作品の価値観を洗い出し、作品が現在の難民事情に対して如何なる立場で関与し得るかを解明する。これにより、芸術学と政治学との学際的領域に対してアクチュアルに迫る方法論的モデルを提供し、視聴覚メディアと世界変動との結びつきに対して学術的に応答する。

### 3. 研究の方法

21世紀のドイツ映画賞(作品賞)受賞作に関し、「難民としてのドイツ人」という視点から現代ドイツ映画史を作成し、ドイツ・アイデンティティの変容と複雑性を捉える。そのために次のような方法で研究を進めた。

- 1) 本研究はメディア論的な視点からの考察を行う。それは、映画をメディアの一種と捉え、映画の受け手を映画がどのような〈価値規範〉へと方向づけているかという点に着目して行う考察のことを指す。映画作品が投げ込まれる社会空間は、価値観という点において空白な空間でも中立的な空間でもない。そこはすでに哲学的・宗教的・政治的・歴史的等々の様々な通念・常識・教養が、特定の立場を取って滞留する世論空間である。だから、ある物語の有する〈意味〉がその世論空間に投げ込まれるなら、すでに存在する個々の立場との雰囲気的な同調・反発・競合によってその〈意味〉はある規範的な価値へと生成し、人々をその〈価値規範〉の方向へと促すことになる。本研究はそうした力動的関係性の中で顕在化する価値の方向性を捉えることを旨とする。
- 2) 本研究が対象とするのは、2000年代から2010年代にかけてのドイツ映画賞作品賞を受賞した一連の作品群である。映画を分析する際に特定の映画賞の受賞作品に焦点を合わせることは、映画作品をメディア論的な視点から考察する上で重要な方法論の一つとなる。メディア論的なアプローチの眼目は、人々を方向付ける映画の〈価値規範〉の可能的なあり方を明らかにすることである。その場合、作品が受賞作であるなら、映画が提示する〈価値規範〉は高度に権威づけられ、より積極的に称揚されていると言ってよい。よって受賞作が提示する〈価値規範〉は、ドイツ社会がどのようなことに対して関心を示していたかをより強く映し出す鏡となる。本研究がドイツ映画賞に着目するのは、このような理由による。
- 3) 「ドイツ映画賞」は言わばドイツのアカデミー賞に相当し、ドイツ映画を対象とした国内で

最も権威のある映画賞である。それを裏付けるのは、総額で 300 万ユーロに迫る国内賞最高額の賞金である。この賞は 1951 年以來の長い伝統を有し、現在では 70 回を超える実績を持つ。ドイツ映画賞には様々な部門が存在する。中でも最優秀物語映画賞 (Bester Spielfilm) というのがいわゆる作品賞に相当し、年ごとに三つの受賞作が選出されてきた。それら 3 つの作品は金・銀・銅の 3 種類にランク付けがなされ、年によって金・銀・銅それぞれ 1 作品ずつ選ばれる場合と、金が 1 作品、銀が 2 作品選ばれる場合とがある。21 世紀以降の受賞作品に関してその物語内容を精査してみたとき、そこで取り上げられる物語の題材は様々であるが、とりわけドイツに特有のものとしては「移民の背景を持つ者」「ナチ・ドイツ」「東西ドイツ」の 3 つを挙げることができる。

- 4) 映画が公開されるということは、結果的に映画が顕在化させる〈価値規範〉の「称揚」であり、それと対立する価値に対しての「批判」を意味する。個々の映画作品は特定の社会問題や歴史事象を題材としており、映画の公開はそのような諸テーマに関する一定の意見やメッセージを世間に対して言わばプレゼンテーションしていることに他ならない。また、そうした営みは諸テーマを巡る通時的あるいは共時的な論争の場を立ち上げつつその論争に参加しているということの意味する。メディア論的な視点とは、そのような価値の論争を焦点化する「イメージ・ポリティクス」の見地から映画を捉え直すことにつながる。それゆえ、本研究では映画作品が投げ込まれる既存の世論空間を把握するため、ドイツの要人や知識人の政治的・教養的言説を把握する。
- 5) 映画作品が立ち上げる論争のモチーフとして本研究が焦点化するの、「難民としてのドイツ人」という戦後ドイツのセルフ・イメージである。この自己表象を把握するため、本研究はドイツ要人の言説を整理、分析、考察する。主なものとしては、「集団の罪」をめぐるトーマス・マンとカール・ヤスパースの言説の特徴を整理し、分析考察を行った。またナチに対するドイツ国民の抵抗イメージを把握するため、ヒトラー暗殺を企てて処刑された「7 月 20 日事件」に関して、ドイツ要人の追悼記念演説を把握し、分析考察を行った。本研究ではそれらの過程でたどり着いた〈ドイツ人のディアスポラ〉という戦後ドイツのセルフ・イメージに基づいてメディア論的な分析考察を行う。この言葉は、ゲーテの言葉を引き合いに出しつつトーマス・マンが 1945 年の敗戦直後に行ったワシントンでの講演に基づく。
- 6) 2000 年代から 2010 年代にかけてドイツ映画賞作品賞を受賞した作品の中から、ドイツに特有の題材、「移民の背景を持つ者」「ナチ・ドイツ」「東西ドイツ」を主要題材とした諸作品を抽出し、あら筋や主題展開の把握・記述作業を行い、そして、メディア論的な考察を行った。《グッバイ・レーニン》をはじめとするいくつかの作品については詳細な分析考察を行った。そして、「難民としてのドイツ人」という戦後ドイツのセルフ・イメージを捉えるため、〈ドイツ人のディアスポラ〉というモチーフに着目し、メディア論的な考察を行った。その上で本研究は、〈ホーム〉をキー概念として、映画作品の分析考察を行った。
- 7) 本研究は、一つの異文化理解の試みでもある。ここでは「異文化理解」を単なる「同文化理解」とは区別しておきたい。映画を芸術作品あるいはエンターテインメントとして楽しむの対象にすることは間違っていない。けれども、そのような営みにおいて、私たちは異国の映画のある一部分には共感する一方で、共感できない部分に関しては拒絶したり排除したりすることに意外と抵抗がない。特に本研究が考察対象とするドイツ映画には、日本社会にとって馴染みの薄いユダヤ・キリスト教的な世界観やイスラーム的な世界観を背景とした作品が少なくない。そうした自分たちにとっては異質な部分を度外視して、私たちは「楽しめた」「楽しめなかった」という評価を簡単に下してしまう。しかし、自分の共感できる部分を消費するだけでは「同文化理解」とは言っても「異文化理解」とは言えない。むしろ私たちが普段から慣れ親しんでいる社会常識や社会通念によっては理解しがたいもの、自分たちの理解の枠組みからこぼれ落ちてしまうものに極力、目を向けることが本研究のスタンスである。

#### 4. 研究成果

主要な研究成果は著書『ドイツ映画史の基礎概念：新世紀のディアスポアラ』（2022 年）として出版した。その概要は以下の通りである。

##### 1) 移民の背景を持つ者

対象作品：《愛より強く》《タフに生きる》《そして、私たちは愛に帰る》《よそ者の女》《おじいちゃんの里帰り》《女闘士》《ヴィクトリア》《女は二度決断する》

「移民の背景を持つ者」を主要な題材とする作品群を〈ドイツ人のディアスポラ〉という観点から総括するならば、2000 年代の諸作品は総じて〈ホーム〉に「帰還」する物語を描き出したが、2010 年代になって〈ホーム〉が「消失」する物語へと移行した。特筆点として 3 つを挙げたい。第一に、因襲的な父権的暴力性からの解放が挙げられる。2000 年代の作品

に登場する人物の多くは、トルコをはじめとする異教的な封建的価値観の中で苦しみ、そこから逃れようともがく。ときにその暴力性が自分の中に存在していることに気づき、愕然とすることもある。とはいえ、2000年代の作品は父権的暴力性との関係の中で自分自身を見失っても、最終的には一定の着地点へと帰還することができた。ところが、2010年代になると、そのような回帰は見られなくなる。人々は自他の父権的暴力性の前に、より深刻な事態へと追いやられてしまう。こうした因襲的な父権的暴力性に対置されるのが、近代的な自我に基づいて自由に自己決定を行う個人の存在である。よって第二の論点として、近代的な自己決定の精神の称揚を挙げることができる。2000年代の登場人物は自由な意志によって父権的な暴力性に抗おうとし、その試みは幸運にも一定の成功を見ることできた。しかし、2010年代の作品では、自己決定の精神が様々な暴力性と対峙したとき、自分自身の方が消失してしまい、ここに近代的自我の悲哀を見ることできる。第三に、ナショナル・アイデンティティへの無関心が挙げられる。2000年代の登場人物は、自身のナショナル・アイデンティティを持ってはいても、それを個人が生きる上でのアイデンティティにすることはない。その一方で強調されるのがローカル・アイデンティティであり、登場人物は自身の身体的・精神的郷里への帰還を指向する。この振る舞いは、一種のヨーロッパ・グローバルリズムでもあって、近代ヨーロッパ的な価値観の拡張を意味した。ところが、2010年代になると、そのような価値観の拡張は壁にぶつかる。様々なローカリズムの融合は中心性の喪失をもたらし、パーソナル・アイデンティティは多方に引き裂かれ、無数の匿名性の中へと雲散霧消する。

## 2) ナチ・ドイツ

対象作品：《名もなきアフリカの地で》《ベルンの奇蹟》《白バラの祈り》《4分間のピアニスト》《ウェイヴ》《ジョン・ラーベ》《白いリボン》《女闘士》《コーヒーをめぐる冒険》《ハンナ・アーレント》《さよなら、アドルフ》《アイヒマンを追え！》

「ナチ・ドイツ」を主要な題材とする2000年代の作品群を「闇教育」との連関において総括するならば、次のように理解できる。物語の中で描かれる「教育する者」と「教育される者」との衝突は、ナチ世代を意味する「旧いドイツ」と戦後世代を意味する「新しいドイツ」との衝突を象徴し、その衝突は物語の結末において「和解」へと至る。登場人物は自身の精神的故郷を失っているが、映画は最終的に自身の〈ホーム〉に気づく物語、あるいは〈ホーム〉へと帰る物語になっている。ところが、2010年代になると2000年代のようにもはや「旧いドイツ」との「和解」は描かれず、総じて「旧いドイツ」との「決別」が描かれ、主として〈ホーム〉を失う物語が語られるようになる。「ナチ・ドイツ」を扱った諸作品に通底するのは「闇教育」のモチーフであり、これに関してやはり3つの特筆点を挙げておきたい。第一に、権威主義の専横性を挙げることができる。2000年代の諸作品には権威主義的な性格を持った人物が登場し、規律や服従を一方的な命令として理不尽に要求する。第二に、権威主義的性格は受けての側にも見出され、権威に追随することに大きな喜びを感じる者が登場する。2000年代においては、そのような権威主義が自分の中にあることを自覚し反省することによってそこから解き放たれ、一定の着地点へと落ち着く物語が描かれた。その際、権威主義から解放されるための対抗手段となったのが、倫理的価値の称揚である。これが第三の特筆点である。旧いドイツの中にも一定の倫理的な人間性を認め、そうした人間性に対する信頼が権威主義的な旧いドイツとの和解を促した。ところが、2010年代になると、権威主義から完全に解放されることの難しさが示される。権威主義への指向は専横性を行使する方の側にも受けての側にも人々の中に広く深く根ざしており、人間がそれを自覚し省みることは容易でない。その害悪たる特徴の一つはそれが連鎖することによって、人々が権威主義の連鎖を断ち切るためには、旧いドイツとの積極的な対決姿勢が求められる。旧いドイツの中にもはや信頼を置くことはできず、世間に溢れる権威主義と対決する者は孤独と不安の淵に沈むのである。

## 3) 東西ドイツ

対象作品：《階段の踊り場》《グッバイ、レーニン！》《幻の光》《何でもツッカー！》《善き人のためのソナタ》《東ベルリンから来た女》《誰でもない女》《ヘビー級の心》《グンダーマン》

「東西ドイツ」を主要な題材とする作品群を総括すると、2000年代において祖国の「再生」を描いた物語は、2010年代になって祖国の「贖罪」を描く物語へと移行する。東西冷戦終結後の混乱の中、祖国の「再生」を描く2000年代の物語は、総じて〈ホーム〉に気づく、〈ホーム〉を取り戻す物語となっている。ところが、2010年代になると「東西ドイツ」を扱った作品群は2000年代のように祖国の「再生」を描くのではなく、祖国の「贖罪」を描くようになる。それらはこれまでの諸作品があまり焦点化しなかった東ドイツの負の側面を正面から取り上げ、その罪責を問う内容となっている。それゆえ、もはや作品が〈ホーム〉を取り戻す物語を描くことはなく、代わって〈ホーム〉を「失う」物語や〈ホーム〉を新たに「創る」物語が描かれるようになった。やはりここでも3つの特

筆点を挙げたい。第一に、冷戦終結後の東西の経済状況の格差が挙げられる。2000年代においては、しばしば登場人物の経済的な困窮状況が描かれた。東西の経済格差は埋まらず、旧東欧地域に暮らす人々は、多かれ少なかれ楽でない暮らしを強いられる。それでも現状に対する自覚において、物語は旧東欧地域の人々に対して希望を持ち、タフに生きることを促す。しかし、2010年代になると、東西の経済格差に対する関心はほぼ見られない。代わって焦点化されるのは、特にシュタージに代表される東ドイツの負の側面であり、これが第二の特筆点である。2000年代においてはシュタージを主人公にする物語があったとしても、むしろ善きシュタージが描かれた。ところが、2010年代においてはシュタージの悪事を真正面から取り上げ、批判的に描くようになる。第三に、2000年代の諸作品はどのような題材を扱うかにかかわらず、〈ホーム〉への回帰や〈ホーム〉の再認を指向したが、2010年代では、「移民の背景を持つ者」や「ナチ・ドイツ」を扱った諸作品が〈ホーム〉を失う物語を中心に描き出したのに対し、「東西ドイツ」を扱った作品群では新たに〈ホーム〉を作り出す物語が中心となっている。

- 4) 21世紀のドイツ映画賞作品賞を受賞した作品群の中からドイツに特有の題材として「移民の背景を持つ者」「ナチ・ドイツ」「東西ドイツ」を取り上げ、それらの諸作品の2000年代の傾向と2010年代の傾向とを理解するための基礎概念として、「帰還」と「消失」、「和解」と「決別」、「再生」と「贖罪」の3組を本研究は提示した。これらを手掛かりに、20世紀の半ば戦後のドイツ社会に投げ入れられた〈ドイツ人のディアスポラ〉というモチーフに対して21世紀の受賞作がどのように応答したかと言えば、2000年代の諸作品は〈ホーム〉に帰る・〈ホーム〉に気づく物語を展開し、2010年代の諸作品は〈ホーム〉を失う・〈ホーム〉を築く物語を展開した。新世紀に入って自分たちの〈ホーム〉を取り戻したかに見えたドイツ人だが、2010年代になって再び自分たちの〈ホーム〉を見失ってゆく。しかし、その一方で新たな〈ホーム〉を獲得する方向性も示唆された。2010年代におけるこの2つの方向性は決して矛盾するものではなく、新世紀のディアスポラは総じて〈ホーム〉を刷新する方向へと進みつつあると言える。
- 5) 本研究は「同文化理解」とは区別される「異文化理解」のスタンスに立つ。特に多くのドイツ映画に通底しているユダヤ・キリスト教的な世界観に随時関心を払いつつ研究を行ってきた。しかしながら、このような研究を進める中で様々な圧力にさらされてきたことを付言しておかねばならない。とりわけ聖書やホロコーストに関する書物が毀損されたり汚損されたりする被害を経験した。信じがたいことであるが、私たちが置かれている日本社会の現状を認識しなくてはならない。ドイツ映画賞を獲得したどの作品にもドイツ社会に暮らす人々／暮らした人々の苦勞がまざまざと描かれている。20世紀においてドイツ社会は、戦前の民族社会主義(ナチズム)と戦後東ドイツの国家社会主義という二つの全体主義を経験し、また大小含めてたびたびのテロリズムにも見舞われた。そして、こうした時代へと逆戻りするきっかけはいつの時代にもくすぶっているという自覚がドイツ社会には存在する。このような全体主義的な危機が我が国にも潜在しているという自覚が得られたことも、本研究の研究成果の一つに加えておきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>古川 裕朗   | 4. 巻<br>62(1)         |
| 2. 論文標題<br>ドイツ映画賞作品史（5） 東西ドイツ（2000年代）                                     | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>修道商学 = Papers of the Research Society of Commerce and Economics | 6. 最初と最後の頁<br>27～62   |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15097/00003067                              | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                                     | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>古川 裕朗   | 4. 巻<br>62(2)         |
| 2. 論文標題<br>ドイツ映画賞作品史（6） 東西ドイツ（2010年代）                                     | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>修道商学 = Papers of the Research Society of Commerce and Economics | 6. 最初と最後の頁<br>1～27    |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15097/00003210                              | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                                     | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>古川 裕朗   | 4. 巻<br>61(1)         |
| 2. 論文標題<br>ドイツ映画賞作品史（3） ナチ・ドイツと闇教育（2000年代）                                | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>修道商学 = Papers of the Research Society of Commerce and Economics | 6. 最初と最後の頁<br>89～115  |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15097/00003001                              | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                                     | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>古川 裕朗   | 4. 巻<br>61(2)         |
| 2. 論文標題<br>ドイツ映画賞作品史（4） ナチ・ドイツと闇教育（2010年代）                                | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>修道商学 = Papers of the Research Society of Commerce and Economics | 6. 最初と最後の頁<br>117～140 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15097/00003002                              | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                                     | 国際共著<br>-             |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>古川 裕朗   | 4. 巻<br>60(1)         |
| 2. 論文標題<br>小津安二郎《東京物語》における終戦の反復 1953 年7 月と1945 年8 月の照応    | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>広島修大論集 = Studies in The Humanities and Sciences | 6. 最初と最後の頁<br>57 ~ 75 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.15097/00002798             | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)                    | 国際共著<br>-             |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>古川裕朗                                | 4. 巻<br>60(2)       |
| 2. 論文標題<br>ドイツ映画賞作品史 ( 1 ) 移民の背景を持つ者 (2000年代) | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>広島修大論集                              | 6. 最初と最後の頁<br>79-93 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)        | 国際共著<br>-           |

|   |                      |
|---|----------------------|
| 1. 著者名<br>古川裕朗                                | 4. 巻<br>60(2)        |
| 2. 論文標題<br>ドイツ映画賞作品史 ( 2 ) 移民の背景を持つ者 (2010年代) | 5. 発行年<br>2020年      |
| 3. 雑誌名<br>広島修大論集                              | 6. 最初と最後の頁<br>95-116 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)        | 国際共著<br>-            |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>古川 裕朗   | 4. 巻<br>59(1)         |
| 2. 論文標題<br>映画《グッバイ、レーニン!》における 父 のイメージ 国民と祖国の再生            | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>広島修大論集 = Studies in The Humanities and Sciences | 6. 最初と最後の頁<br>61 ~ 87 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.15097/00002723             | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)                    | 国際共著<br>-             |

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名<br>古川 裕朗   | 4. 巻<br>58(1)           |
| 2. 論文標題<br>「集団の罪」を巡るドイツ・アイデンティティ トーマス・マンとカール・ヤスパース        | 5. 発行年<br>2017年         |
| 3. 雑誌名<br>広島修大論集 = Studies in The Humanities and Sciences | 6. 最初と最後の頁<br>151 ~ 167 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.15097/00002533             | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)                    | 国際共著<br>-               |

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名<br>古川 裕朗   | 4. 巻<br>58(2)           |
| 2. 論文標題<br>「7月20日事件」追悼記念演説を巡るドイツ・アイデンティティ 東西冷戦下, 1954年から1979年まで | 5. 発行年<br>2018年         |
| 3. 雑誌名<br>広島修大論集 = Studies in The Humanities and Sciences       | 6. 最初と最後の頁<br>177 ~ 198 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.15097/00002631                   | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)                          | 国際共著<br>-               |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

|                          |                 |
|--------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>古川裕朗 / 矢田部順二   | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>レタープレス         | 5. 総ページ数<br>98  |
| 3. 書名<br>ドイツとチェコに見る歴史の清算 |                 |

|                                    |                 |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>古川裕朗                     | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>レタープレス                   | 5. 総ページ数<br>90  |
| 3. 書名<br>ドイツ映画論集 ナチ第三帝国・東西ドイツ・移民難民 |                 |



|                                 |                 |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>古川 裕朗                 | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>九州大学出版会               | 5. 総ページ数<br>282 |
| 3. 書名<br>ドイツ映画史の基礎概念：新世紀のディアスポラ |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|                   | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                      | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                   | 備考 |
|-------------------|--|---|----|
| 研究<br>分<br>担<br>者 | 矢田部 順二<br><br>(Yatabe Junji)<br><br>(30299284) | 広島修道大学・国際コミュニティ学部・教授<br><br><br>(35404) |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

|         |         |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|